

# 慈濟

ものがたり

全世界が善意を注ぐ  
愛のこもったワクチンが学校を護る



—二〇二二年歳末祝福会のテーマ—

菜食で生命を護り、  
幸福な世界に！

共に善行して愛を広めよう！  
信・願・行





慈済を含む3つの主な民間企業と団体が購入したビオンテック（BNT）社製ワクチンが、中秋節の連休前後に数回に分かれて到着した。台湾全土の中・高校生は10月に1回目の接種を終え、感染から身を守る力を得た。  
 (撮影・黄筱哲)



慈済日本サイト

# 目次

【編集者の言葉】

共に善行するエネルギーを集めよう

善耕／訳 4

【主題報道】

愛のこもったワクチンが学校を護る

明陞／訳 8

シリア難民・善には善で恩返し

田中亞依／訳 10

故郷のコロナ禍を気遣う・慈善バザーリレー

葉美娥／訳 20

無数の「一個人」に呼びかける

明滙／訳 29

【国際慈善】

ハイチ地震 災害支援に二つの難題

惟明／訳 34

ドイツ西部の水害

御山凜／訳 56

キッチンカーで復旧を応援

【證嚴法師のお諭し】

蚩は群れを成してこの世を照らす

慈願／訳 68

【台湾慈善】

私のホームレスチャイルド

翁俊彬／訳 74

【親と子と教師、三者の本音】

子供がペットに出会った時

常樸／訳 80

【聞・思・修】

一番見え難いのは自分

江愛寶／訳 85

【人物誌・台湾】

善行に尽くす社長・病院用ベッドを担ぐ

御山凜／訳 90

【行脚の軌跡】

あなたが居てくれて良かった

濟運／訳 100

十二月の出来事

濟運／訳 106

## 共に善行するエネルギーを集めよう

新型コロナウイルス感染症が爆発的に拡大して以来、ワクチンはこの世紀の疫病を終わらせる切り札と見なされてきた。科学技術は可能な限りの試みをして、ワクチンの開発には少なくとも十年の研究期間が必要という今までの考えを覆した。このウイルスのワクチンは、たった一年ちよつとの臨床試験を経ただけで認可され、大規模な接種が行われている。

これは人類の医学史上における一大躍進であるが、世界的にもワクチンを生産する能力には限界があり、政治的、経済的な要因と相まって、ワクチンを購入する機会は平等ではない。

国際情勢という難問に直面して、台湾のワクチン入手は困難を極めた。感

染発生当初は公衆衛生対策を以て順調に防疫を進めてきたが、それでも五月から警戒レベルが3に引き上げられると、感染拡大長期化などへの緊張感からしばしばワクチン接種の重要性が浮き彫りとなった。

今月号の主題報道にある「ワクチンの購入と寄付」に関する記事を見ると、今年慈済基金会が行ってきた慈善ケアの中核を成していたことがわかる。七月、政府の委託の下に、慈済基金会は鴻海集団の永齡慈善基金会、TSMCと共同で、合計一千五百万回分のビオンテック（BNT）製ワクチンを購入し、管轄政府機関に寄付した。それでやつと九月からワクチン接種が始まった。

慈済がワクチン購入を決めたのは、證嚴法師の一貫した精神に基づいている。これは、三十五年前に困難を恐れず、医療資源が不足していた花蓮で病院を建設し、そして台湾中部大地震（九二一大地震）の後、被災した五十一年の学校再建プロジェクト「希望工程」を行った時と同じである。法師は



かつて「お金がどこにあるのかは分かりませんが、愛がどこにあるのかは知っています」「正しいことは実行に移せばいいのです」と言ったことがある。これに応えて、慈悲深い企業家から積極的護持を得られただけでなく、世界中の慈済ボランティアも共に愛の心を募って共感を寄せたのだ。

ワクチン接種により、重症や死亡に至るリスクと医療システムへの負担を軽減することができる。コロナ禍が生計に与える影響が大きい低所得者にとつて、その益は必然的に各種救済支援を上回ると言えよう。しかし、ワクチンの接種率が高いと知られている多くの国でも、変異株ウイルスの感染拡大や社会活動の増加に加え、公的機関の予措置緩和が早すぎたことで感染が再び拡大した様子から、今でも防疫対策を軽んじてはいけないことが見て取れる。

変異を繰り返す新型コロナウイルスに対して、「集団免疫」の目標が達成できるかどうかはまだ未知数である。専門家は、ワクチン接種がウイルスの変

異に追いつけない時、かえってワクチンの保護能力を弱めてしまうと率直に言い切る。国際通貨基金（IMF）のエコノミストは、ワクチン接種の機会が不平等であるため、世界経済の回復がより遅く、且つ不均衡になると警告している。

現在、国内外でコロナ疲れの現象が見られる。ワクチン接種後も、感染防止には気を緩めず、警戒する必要がある。證嚴法師は、平穏な時に危機に備えて準備を整え、自己防衛を徹底し、自愛して人をも愛してこそ、家庭全体、そして社会全体が平安を得る、と強調している。

慈済ボランティアも法師の呼びかけに応え、今回のコロナ禍を機会に生命を尊重する菜食を推進している。動物を尊重する敬虔な愛の心でもって、共に善行するエネルギーを結集し、真に身心を守る防護ネットを作ろう。

（慈済月刊六六〇期より）

# 愛のこもったワクチンが学校を護る

台湾全土の学校では、一回目のBNT新型コロナワクチンの接種を、十月中旬までに終えた。十二歳から十七歳までの学生が保護力の基本を得たことで、学校内の感染拡大も防げる。ワクチンを手に入れるのは容易な事ではなかった。

鴻海永齡とTSMC、慈濟基金会は共同で、様々な困難を乗り越えて買い付け、寄付した。また、全世界の愛を携えた人たちが、慈濟基金会と共に膨大な経費を負担した。大学生とサラリーマンはアルバイト代や給料を寄付し、ビジネスリーダーたちが率先して模範を示した。市井の商店はチャリティー販売で、海外在住の人々は故郷を思って、支援した。慈濟基金会の長期ケアを受けているシリア難民も惜しみなく寄付し、善で善の恩返しができる。

●9月22日、学校でのワクチン接種初日、接種を申請した台南慈濟中学校と高校の999人の生徒が、医師の問診後にワクチンを接種した。(撮影・黄筱哲)



トルコ・マナハイインターナショナルスクール

## シリア難民 善には善で恩返し

「やっと恩返しできる時が来た！」。マナハイインターナショナルスクールの学生は、登校日に竹筒貯金箱を持参し、慈済のワクチン購入を支援した。教職員は給料日にその一部を寄付し、校長は学校を代表して、台湾の慈済が絶えず寄り添ってくれ、故郷を追われたシリア人に最善を尽くしてくれたことに感謝した。

### 九

月六日はトルコ・マナハイインターナショナルスクールの給料日

である。教職員は今日、一大プロジェクトを成し遂げようとしている。台湾慈済

のワクチン購入の支援である。これまで頻繁に募金活動を行ってきたが、今回は特別な幸せと喜びに満ち溢れていた。彼らは機会があれば、これまで慈済がシリア難民に施して来た愛に恩返しをしたいと思っていたからだ。

マグド先生は、「長年、慈済は我々を気にかけて下さり、無料診療や救済補助金、教育支援などを提供して下さいました。我々は必ずこのご恩にお返しをし、その感動と感謝の気持ちを伝えたいと思っていました」と語った。

ゼケリア先生はシリアで教職に就いて

四十年以上になるが、トルコで再び教鞭を執れることに非常に感動していた。「いくら募金しても、ここ数年来我々に寄り添って下さった世界中の慈済ボランティアへの恩返しには足りません。台湾の人は我々の母国ができないことをして下さいました」と語った。

教職員からの募金は、二百、四百、六百里ラと様々だが、その金額は彼らの何日分もの給料にあたる。慈済ボランティアの胡光中（フー・グオンジョン）さんは、「教職員たちの月給は約三千〜四千里ラ（約三・三万円）です。一千里ラは台湾ド



ルに換算すると約三千元(約一万円)で、彼らにとつては生活に欠かせないお金です。しかし、教職員は、台湾の人から貰った愛にいつか恩返しをしたいと言っています」と語った。

心からの奉仕は教義の実践でもある。ファティマ先生はこう語った、「我々は台湾の人のためにワクチンを寄付しま

す。アッラーがコーランでこう語っています。『一人の人間を復活させることは全人類を復活させるようなものだ』。

苦しみを味わったからこそ、  
慈善を習慣にする

二〇一五年一月、シリア難民を支援するマナハイ小中学校がイスタンブール省スルタンガージ市に設立され、学生らの学費は慈済が補助した。二〇一八年

にはマナハイインターナショナルスクールに名称を変更し、アメリカ教育機構の認証も受けた。学生は卒業時にアメリカとトルコが認める卒業証書を受け取ることがができる。以前は工場

コロナウイルスの感染が落ち着くと、マナハイインターナショナルスクールは9月に授業を再開した。学生たちは少しずつ貯めた小遣いを寄付し、慈済のワクチン購入を支援した。

で働くことで家族を養っていた子どもたちは、ようやく教育を通して、再び難民家庭の希望となった。そして異国で暮らす知識人らは、マナハイ校で教鞭を執ると同時に、尊厳も取り戻した。

慈済は毎月三千名の学生、六千世帯の家庭をケアしている。胡さんは、「新型コロナウイルスの流行後、集会はできなくなっていました。特に支援を必要とする難民世帯への毎月の生活費は配付を止めたことはなく、ボランティア自らが各家庭を訪れ、補助金を手渡しするよう変更しました」と言った。九月に

れ、家は破壊され、拉致された夫は今でも音信不通である。二〇一三年、彼女は二人の子どもを連れてトルコに密航したが、彼女を教師として受け入れてくれる学校はなく、一度は清掃人として働くしかなかった。二〇一七年、彼女は近所の人から慈済のことを聞き、それ以来、補助金に頼って生活している。ボランティアは空っぽだった彼女の住まいを見て、タンスや戸棚、コンロなどを提供した。ジ・シャンさんは、「子供たちは彼らの父親を知りません。慈済基金会は彼らの親のようなものです」と語った。

なってワクチン接種率が七十%に達すると、各業種は営業を再開し、学校でも対面授業が再開され、室内の人数制限も緩和された。皆がウイルスと共存していく方法を学んだ後、慈済も会場での配付を再開し、二週間で計二十九回の活動を行い、六千世帯に対して物資購入プリペイドカードを配付した。以前からのケア世帯だけでなく、新型コロナウイルスで失業した難民家庭の人たちにも、共に困難を乗り越えられるよう、支援を行った。

ジ・シャンさんはシリアでは校長を務めていたが、残酷にも戦争で教職を奪わ

体が弱いジ・シャンさんには安定した収入はないが、買い物をした後にはおつりを竹筒貯金箱に入れるよう子どもたちに教えている。配付会場でジ・シャンさんは竹筒を取り出し、「これは一つのチャンスです。必要としている人を助けられるだけでなく、彼らに自信をつけることができます。慈善を一つの習慣にするのです！」と言った。彼女の話は会場にいた難民家庭の心を動かし、以降、皆が積極的に竹筒貯金を慈善という功德の海に入れるようになった。

彼女の下の息子であるサメハ君は今学





## 登校日にはリュックと 竹筒貯金箱を背負って

去年の三月、トルコで初めて新型コロナウイルスの感染者が出た際、政府は直ちに全国の学校に授業停止するよう通達した。その期間、マナハイインターナ

期、マナハイスクールに転校した。成績優秀なサメハ君の夢は歯科医になることだ。「僕の二つ目の夢は、将来この学校のボランティアになることです。胡光中さんが僕たちにくれてくれるような良い行いをしたい」と言った。

シヨナルスクールの教師は、同じように登校して授業を行い、学生たちは自宅オンライン授業を受けた。十八カ月にもわたるリモート授業を経て、今年九月七日から通常の授業が再開された。学生たちは興奮を隠しきれない様子で、「スマホでの授業は目に悪いし、先生にも会いたかった。学校が大好きだし、やっと友達にも会えた」。一年半経ってやっと学校に戻ることができ、先生に会えて嬉しい。先生たちは一段と綺麗になったと思う」と話した。

学生たちは久しぶりにカバンを背負って学校に登校しただけでなく、愛のこ

もった竹筒貯金箱も持参し、台湾の人を助けるために、慈済のワクチン購入を支援した。アハメトさんは、「慈済に恩返しをしたいのです。慈済が私たちにしてくれた支援に比べたら微々たるものですが、小さなことでも努力し続けます」と言った。

マナハイスクールの学生であるファティマ・ベトウさんは戦争で父親を亡くしており、彼女は二人の妹、そして母親

マナハイインターナショナルスクールの教職員は、7月という早い時期に、慈済がワクチンを購入して寄付する計画があることを知り、寄付に協力したいとの意思を表し、9月の給料日にその心願を叶えた。

と助け合いながら暮らしている。彼女たちもまた、慈済が生活支援する家庭である。ファティマ・ベトゥさんは、「私たちは難しい状況に置かれていますが、慈済から絶やさず愛の心を募ることを学びました。私たちのこの小さな気持ちは、世界各地に向けて伝える愛と平和のメッセージなのです。私たちはこの偽りのない愛で、慈済の皆さんと共に、尊敬する台湾の方々にワクチンを届けたいと思っています。慈済はこれまでシリア人や助けを必要としている世界中の人々を支援してきました。私たちの愛は慈済が与えてくれた恩恵へのお返しです」と言った。

この期間、マナハイスクールの教職員と学生らは約二万USDにも及ぶ募金を集め、慈済のワクチン購入を支援した。「なぜ苦しい生活を送っている難民に募金を呼び掛けるのか、と言う人がいます。しかし、我々が伝えたいのは、一滴の水を大海原に垂らすのと同じように、確かに一月に三十枚のコインの募金は、合わせても五元（約十七円）にも満たないものでも、彼らが毎日、善の思いを起こし、竹筒にお金を入れた時、支援を受ける側から人を助ける側に変わり、己の人生を覆すことになるのです」と胡さんが語った。マナハイスクールが世界を支援したの

は、これが初めてではない。この数年間、台湾が度重なる風害や震災に遭ったり、アフリカ東部の国々がサイクロン・イダイによる被害を受けたりした際、彼らは率先して慈済の災害支援に協力した。校長のジュマ教授は、「今回の愛の心を募る活動がこれまでの募金と異なる点は、兄弟としての情です。慈済と出会ってからの七年間、我々はずつと恩返しできる機会を待ち焦がれていました。離散して寄る辺のないシリア人に寄り添い、最善を尽くして助けて下さった、善の心を持った台湾の方々に感謝します」と言った。

ジュマ教授は、今日は愛と愛が出会い、

善には善で恩返しをする、歴史的な一日だと語った。「我々はわずかな寄付でも美しい感謝の意を表し、慈済に対する我々の愛と感謝を記しました。そして皆は今、台湾の兄弟姉妹にこう伝える資格を得ました。『私たちは台湾の皆さんに対する兄弟姉妹の愛と友情と忠誠心を持っています。私たちは全ての愛を結集し、台湾の皆さんの命と安全のためなら如何なることも惜しみません。なぜなら皆さんの命は我々の命であり、皆さんの安全は我々の安全なのです。私たちは兄弟姉妹であり、家族なのですから』と」。

（慈済月刊六六〇期より）

アメリカ・ノースカリフォルニア

## 故郷のコロナ禍を気遣う

## 慈善バザーリレー

懐かしい味に心が満たされる台湾グルメ、自家菜園で採れた果物と蜂蜜。

ウェブサイトを立ち上げ、これら我が家の宝物を提供しようと考えている。

慈済のコロナウイルス感染拡大防止の経費を募金するために様々なバザーが開かれた。

何でも売ることのできるバザーの出品物には、皆の思いやりと祝福の心が込められている。

# ア

メリカでは昨年の三月から新型コロナウイルスの感染が急拡大した。

一年半後の今年五月中旬からは、台湾も

新型コロナウイルスの感染者が急増した。

コロナ禍に直面していた台湾民衆の苦境

に私たちも共感し、関心を寄せた。慈済

アメリカ総支部は、台湾が今回のコロナ

禍を乗り切るために、華僑たちが支援の

手を差し伸べてくれることに期待して、

ノースカリフォルニアのボランティアは、

各種慈善バザーを開催し、手を取り合っ

て台湾を守り、世界中の慈済人の心の故

郷である台湾を守ろうと呼びかけた。

先ず、オークランド連絡所で、千個の

菜食粽をバザーに出す計画を立てたが、

三日間で四千個の注文が入り、その後も

注文が続いている。ボランティアの蔡文

成（ツァイ・ウエンツン）さんが発心し

て冷凍庫を買って連絡所に寄付したため、

菜食粽の鮮度を保てる上、愛の心を護持

することもできた。ボランティアの范俊

賢（ファン・ツェンシエン）さんもまた、

自分の新居のスペースを提供して、菜食

粽調理用の集中調理場にした。

粽作りの初日、ボランティアたちは敬

虔に合掌して「愛と思いやり」という慈

済の歌を合唱し、和やかな雰囲気の中で

衆生の健康と世界の平穏を祈った。粽作



りの現場でも、一つ一つの粽に慈済人の祝福を込める意味で、念仏の声を流し続けた。

陳麗香(チェン・リーシャン)

さんはクパチーノ市サニーベールのボランティアで、チームメンバーと相談した結果、コミュニティにバザー促進チームを立ち上げ、料理の達人に呼びかけた。

ボランティア江佳陵(ジャン・

ジャリン)さんの両親である、

七十七歳の江世顕(ジャン・スー

シェン)さんと七十三歳の莊鳳珠



(ツォン・フォンツウ)さん

は、新北市新店区の慈誠(男性委員)と慈済委員で、ちよ

うどアメリカ在住の娘に会いに来て、菜食粽作りに参

加することになった。伝統的な味でしかも歯答えのある

野菜饅頭(マントウ)とカボチャ

饅頭(マントウ)は、柔らかい外皮に弾力もあり、中の餡は台湾の懐かしい味がして、海外にいる旅人の味覚を満足させた。

とても料理が上手なボランティアの呉宝秀(ウー・バオシュウ)さんは、全く



八十近い歳には見えないが、何度も慈済ノースカリフォルニア支部の厨房シェフを務めたことがある。彼女が作った伝統的な味の大溪豆乾（干し豆腐）は広く知られている。今回もフアンの期待に応えて百人分を用意してバザーに出したが、すぐに売れ切れてしまい、追加オーダーがどんどん入り、最後には百六十二人分も作った。

8月下旬からスタートした各種バザーは、10月に入って更にスパークが掛かった。ノースカリフォルニア支部のボランティアが、自ら作った様々な菜食デザートを出して、台湾のコロナ禍を支援する、「愛の心を募る」バザー活動を円満に終えた。  
（撮影・朱文廣）

呉さんは謙遜して言った。その調理の腕前は台湾で弟子入りして、師匠から教わったのだそうだ。調理する過程は簡単だが、煮込む二時間、ずっと軽くひつきりなしにかき混ぜなくてはならない。まるで慈済ボランティアが心を込めて忍耐強く長期ケア対象者に寄り添うように、買った人に香ばしい大豆とシナモンや八角の香りを味わってもらった。バザー開催中、呉さんは白内障の手術を受けたが、少し休んでまた豆乾を作り続けた。菩薩は大きく発心し、その願力は強力だ。  
ノースカリフォルニア支部「幸福キャンパス」のボランティアは長年、低所得の

移民世帯が集まっている、イーストパロアルト (E. Palo Alto) コミュニティーで、弱者世帯の子どもの就学を支え、「フードバンク」の配付を支援している。この活動に参加して十数年一日の如くのボランティア楊韻璇（ヤン・ユンシュエン）さんは、電機エンジニアだが、西洋料理も得意という文武両道者である。彼女はエンジニアとしての特性を活かして、普通とは異なった配合で、ノンオイルで低糖質のオレンジ風味アーモンドクッキーを試作し、何人ものボランティアに試食してもらった。健康的でサクサクしたオレンジ風味のクッキーはバザーでも好評だった。



手作り石鹸の達人であるボランティアの陳瑪妮（チェン・マーニー）さんは、慈済ノースカリフォルニア支部の社会教育推進センターで初めて石鹸作りを学んだ。その後、各国の石鹸作りの達人と互いに切磋琢磨して腕前を上げた。今回、作成した手作り石鹸は、最高級オイルを選んで使い、三週間の冷却定型を経ており、華やかな色彩ではないが、真心こめて作成した。注文した人がそれを手にした時、玉のようにやさしい潤いを感じてもらえることを願った。

麗香さんと汪清忻（ワン・チンシン）さんは、庭に植えているパッションフ

チャンスを見逃さず、バザーに参加し、自分の得意料理の一つである韓国風春雨を出した。健康的で低脂肪に加え、味も香りも見えた目も良く、発売当日は秒殺的に売り切れた。

ボランティアの方宝珠（フォン・バオツウ）さんは、デザートを作るのが好きだ。今回も腕のたるさを気にすることもなく、抹茶あずきのロールケーキを作った。有機食材以外は使わず、家族に食べてもらうように丁寧に作った。作るのが楽しいだけでなく、受け取った人も喜んで欲しい、と彼女が語った。

長年、サニーベール市のコミュニティー

ルーツをバザーに出した。ボランティアの李佳錦（リー・ジアジン）さんは、庭の木の下に巣箱を置いて、毎日ミツバチの群れが飛んで来て出入りし、忙しく働く様子を見ている。「和善の蜜」が彼女の生産したハチミツの名称で、純粋で透き通っていて、清らかな花の香りがする。彼女と夫は純粋に優しい気持ちで、微力ながら力を尽くしている。その心はまるで蜂蜜のように、純粋で濃く澄みきっている。

ボランティアの周莎姫（ツォウ・サーチー）さんは料理が上手で、慈済社会人大学の菜食料理教室の講師をしたこともある。日頃は仕事で忙しいが、今回は

で路上生活者に朝食を配付する活動に参加してきた白斌（バイ・ピン）さんは、日頃から木工に興味があり、いつもケア世帯の家具の修繕を手伝っている。今回は自分が手作りした四個のタブレットスタンドをバザーに出したところ、瞬く間に売り切れた。



サンフランシスコ市は多様な文化が入り混じった都市で、ボランティアも異なった国から来ているため、バザーに出した食べ物も異国風味に満ちていた。慈済サンフランシスコ支部は十月に「国際美食菜食週」バザー活動を展開し、四週間、毎週異なるテーマの美食を提供した。台湾、ミャンマー、香港とベトナム料理である。

その他、ネットバザーを通して、紙細工、木彫り羅漢、玉石ペンダント、珍しい石、磁器、竹の水墨画掛け軸など全てが自家秘蔵の宝物を提供している。コミュニティボランティアの愛と人情を

以て勇敢に責務を担う人もいれば、心から護持する気持ちで買う人もいた。

ノースカリフォルニアのベイエリアにある、フリーモント市、サンノゼ市、ウエストサンノゼ市でも、それぞれ評判のあるものやボランティアが得意としている菜食料理をバザーに出した。彼らは優れた腕前で奉仕するだけでなく、食材から作成、包装まで、愛、心、思いやり、感謝の気持ちという四つの心で、口にした食べ物に愛が宿り、善行を行うことを願いながら、慈善バザーを円満に終えることができた。

（慈済月刊六六〇期より）

## 慈済大林病院、慈済斗六病院

文・江珮如、黄小娟（大林慈済病院広報室） 訳・明浜

# 無数の「一人」に呼びかける

コロナ禍が厳しさを増していた頃、嘉義の慈済大林病院と雲林の慈済斗六病院は、院内と地域の健康を守った。ワクチンが順次届くと、医療チームはワクチン接種に全力を尽くし、更に愛の心を募るために立ち上がった。台湾全土の人々が早く健康的な生活を取り戻し、たくさんの方が安全に学校に通えるようになる日が来て欲しいと切望しながら。

## 力

ランコロンという音が病院のロビーに響き渡った。人々が愛の

竹筒（貯金箱）を慈済大林病院に持ち寄り、病院は温かい雰囲気包まれた。

「台湾には愛がある。心を合わせて感染防止に努めよう」と題して愛の心を募り、ワクチン購入を支援する募金活動が行われた。九月三十日午後、司会を担当するボランティアチームメンバーの陳鶯（チェン・インイン）さんが、開会の言葉を述べた。「二人の力は小さくても、その力がたくさん集まることで生まれる『愛のエネルギー』は、無限大にするこ

とができます！」  
慈済大林病院入院長期介護施設の看護部長・郭如娟（グオ・ルージュエン）さんは、自分の子供は間もなく予防接種を受ける中学生だが、もしワクチンが足



BNTワクチンは、12歳から17歳までの若い人に投与できる、世界で初めて認可されたコロナウイルスワクチンである。台湾で使用されている1500万回分は、政府の指導の下に、民間団体と企業が共同で購入したのだが、その過程は容易ではなかった。（撮影・蕭耀華）

りなくなれば、全員が体を保護する力を持つようにはならないので、自分の力はわずかだが、「海老で鯛を釣る」という諺のように、より多くの愛が集まってほしいと願って、この竹筒を寄付した、と述べた。

今年、慈済大林病院は創立二十一周年を迎え、介護サービス、教育面での研究と地域医療で成果を上げているが、それ以上に重症救急医療を担っている。救急外来の主任である李宜恭（リー・イーゴン）医師は、コロナ医療の最前線に立った時、人々の心の苦しみを目の当たりにしたと語った。その苦しみを和ら

げるには、愛でもって諸々の不調和を解消する安定した力にならなければならぬ。同時に彼は救急外来のスタッフに、台湾が困難を乗り越えられるよう、「愛の心を募る」活動への参加を呼びかけた。

総務室事務係長の蔡正偉（ツァイ・ツンウェイ）さんと脳神経外科専属看護師である妻の洪美玲（ホン・メイリン）さんは、竹筒貯金をして十年になり、既に日常生活の一部になっている。今回は半年間貯金した竹筒を取り出し、必要な時に人を救う役割を果たした。硬貨でいっぱいになった竹筒には、長い間絶えることのない夫婦の愛が結集していた。



頼寧生（ライ・ニンスン）院長もまた、「コロナ禍は、世界経済と社会に深刻な影響を及ぼしました。我々同僚も自分の持ち場できちんと役目を果たすだけでなく、愛でもって防護する必要があります。方向が同じである限り、誰もが少し努力して善行すれば、一本の指に力が集まるように、善の念が集まって世界に福をもたらすことができるのです」と言った。

雲林中学サッカーチームの十七人のメンバーは十月の試合のために、他に先立ってBNTワクチン（ファイザー社とビオンテック社が共同開発したワクチン）を接種するため、慈濟斗六病

院を訪れた。また、病院のロビーで行われていた「愛のこもったワクチン・皆で感染予防」と題した祝福会に参加し、購入が容易でなかったワクチンに感謝すると共に、教師と学生は持っていた小遣い銭を寛大に寄付した。簡瑞騰（ジエン・ルイトン）院長とスタッフは、チームが勝利して、雲林に錦を飾ってくれることを祝福した。

簡院長は、BNTワクチンを手にいれるのは容易なことではなく、慈濟基金会を含む多くの慈善団体の募金で達成できたことに言及した。また、祝福会に参加した一人ひとりが、帰宅して、「善行は、

皆で力を合わせることで成し遂げられ、どんなに僅かでもあらゆる布施は愛であり、心にある思いは善である。その愛をさざ波のように広げていこう！」と家族と分かち合っ  
てほしいと言った。（慈濟月刊六六〇期より）

雲林中学サッカーチームは、慈濟斗六病院でBNTワクチンを接種した後、祝福会に参加し、感染予防のために持っていた小遣い銭を寄付した。

（撮影・于劍興）



## ハイチ地震 災害支援に二つの難題

ハイチのコロナ禍は深刻だ。輸入ワクチンは限られた数しかなく、伝染病予防に関する住民の認識も低い。災害支援に立ち塞がる感染防止という難題を克服する必要がある。

もう一つの難題である、軍や警察でさえ抑え切れられないギャングという問題は、困難を極める。ボランティアは、輸送中の強奪から支援物資を守るためにギャングの封鎖した道路を避けて遠回りしただけでなく、深夜に被災地に到着して、翌日の配付準備をしなければならなかった。

一〇二二年の夏、南北アメリカとアジアでコロナ禍が依然として猛威

を振るっていた中、世界を震撼させる天災や人災が起きた。カリブ海の島国ハイ

チの大統領が、七月七日に暗殺されたのである。政局が動乱する中、八月十四日にマグニチュード七・二の地震が発生し、死者二人余り、損壊した家屋は約十三万軒、緊急支援を必要とする被災者は六十五万人に上った。続いて八月十五日、アフガニスタンの首都カブールで、過激

●災害支援チームはハイチで支援物資を現地調達したのだが、業者は買付と梱包に協力しただけでなく、スタッフを動員して、受け取る人にこれは世界中の愛がこもる物だと分かるように、慈済のステッカーを袋に貼ってくれた。







派組織タリバンが政権を奪い、政治の流れが大きく変わって大勢の人が国外に逃れた。この事件は世界の関心を集め、ハイチ震災は国際的な焦点から外れた。

しかし、慈済は、被災地で支援を待っているハイチ人を見捨てることなく、地震発生直後から現地調査と支援活動を行った。慈済アメリカ支部災害支援ケアチームは、九月一日に首都ポルトープ

●ボランティアの張永忠さんは被災状況の視察のためレ・カイ市に赴いた。貧困に喘ぐ現地住民の住宅は建築基準に沿って建てられておらず、鉄筋の代わりに曲がった木の幹を使用していて、強震に立ち向かうことは難しく、損壊していた。

(撮影・Reginald Louissaint Junior)

ランスに到着し、協力関係にあるオーシャン・エンジニアリング社(OECC)園區に入り、同社に勤務している慈済ボランティアの張永忠(チャン・ヨンジョン)さんや現地ボランティアのズッキー・オリブリス神父たちと今後の方針を協議した。ハイチ時間の九月八日からは、被害の大きかった南西部の町レ・カイ市で大規模な配付活動を展開した。

被災した住民を守ろうと身心共に疲れていた神父や修道女にとって、慈済ボランティアの到着は天佑のようだった。地震の後、住む家をなくし、緊急に医療と生活物資を必要としていた人々に、慈済は

食糧を配付しただけでなく、世界中から人々の善意の気持ちを伝えた。そして現地の教会や民衆はそれを感じ取ってくれた。

「地震の後、我々にはすぐに配付できる物資など何もありませんでした。慈済が来てから、全ての支援活動が始まりました。これは住民にとっても大きな意味があります！」とレ・カイ市にあるサレジオ会の責任者、ローズ・モニケ・ジョリコウ修道女が喜びと共に語った。

しかし、順調に進むとみられた支援の行程だったが、コロナ禍や強奪など様々な危険や障害が待ち受けており、第一線のボランティアとパートナーたちは、最

大の警戒心を持ちながら前進した。

## コロナ禍とハリケーン、地震

「私はここに来て二十二年になります  
が、二〇一〇年の大地震の時は、ちょうど  
休暇で台湾に戻っていたため、遭遇し  
ませんでした。今回が初めての大地震で  
す」と張さんが言った。「地震は午前中  
の勤務時間に発生したので、ショックで  
した。正午近くになって、南西部が震源  
地であること、教会や民家が多く倒壊し  
たことを知りました」。

ハイチの慈済ボランティアとして、地

震の二倍で、南西部の大都市であるレ・  
カイ市やジエレミー市などは甚大な被害  
を被った。

七月上旬、大統領が暗殺され、八月に  
は強い地震とハリケーンに見舞われ、貧  
しいハイチは単独で相次いでやってきた  
危機に対応することができないでいる。  
大統領代理を務めるアリエル・アンリ  
首相は国際社会に支援を求めた。ハイ  
チ当局と中華民国駐ハイチ大使館は、直  
ちにハイチ慈済センターにスタッフを  
派遣して、協力を要請した。被災地では  
テントと寝袋などの生活用品を緊急に必  
要としており、張さんは直ちに五百枚の

震の後、先ず、現地ボランティアの安否  
を確認した。また、二〇一〇年の地震の  
際に慈済の再建支援を受けた、シスター  
ズ・オブ・セント・アン教会(Congregation  
of Sisters of St. Anne)を含む三つの  
学校に電話をし、建物の損壊状況を確認  
した。ポルトープランス市は震源地から  
約百二十キロ離れていたため、幸いにし  
てボランティアに怪我をした者がいな  
かった上、支援再建した各学校やハイチ  
慈済志業センターも無傷だった。

しかし、震源地である南西部では多く  
の死傷者が出た。今回の地震で放出さ  
れたエネルギーは、二〇一〇年の大地

エコ毛布をハイチ当局に寄付して緊急に  
対応した。

現地ボランティアの如済(ルージー)  
神父もアメリカ支援チームが到着する前  
に、新学期始業後子供たちの給食に使う  
予定だった食糧を災害支援に回した。「今  
は命を助ける時です。災害支援が先です」  
と如済神父が思いやり深く説明した。

エコ毛布の第一便を送り出すと、張  
さんは視察のため、八月二十一日に南に  
向かった。目にしたのは瓦礫とテント住  
まいの住民の姿だった。五百年の歴史を  
持ち、風光明媚な港町であるレ・カイ市  
では、少なくとも三つのホテルと二つの





教会が倒壊した。元市長は不幸にして亡くなり、病院は負傷者で溢れかえっていた。しかし、一番生活が困難なのは、やはり貧しい農村地域だ。農民が自分たちで建てた簡単な「土壁造りの家」は、今回の強い地震でほとんど倒壊してしまった。

土木技師である張さんによると、南部は首都ポルトープランスと違って、南北に風を遮る山はなく、現地の人々はどんなに貧しくても、風を遮ることができ家を建てる必要がある。「しかし、彼らは建築基準に従って、良質の鉄筋コンクリートで家を建てることができないため、多くの場合、曲がった木の枝を柱に

したり、セメントと砂利を一定の配分で混ぜなかったりするので、地震が来ると耐えられないのです」。

政局の動揺と深刻な災害の中、慈済はアメリカボランティアによる震災支援を発動した。かつて二〇一〇年のハイチ地震の支援活動に参加したシニアボランティアの陳健（チェン・ジエン）さん、邢敏（シン・ミン）さん、范婷（ファン・ティン）さん、そして撮影記録係のジェイミー・プエルタさん一行四人が視察に向かった。より多くの現地ボランティアを募って、災害に対応する能力を高め、彼らに任務を担う志と能力を持ってもら

うよう養成しなければならぬ。

「ハイチは自立しなければなりません」と慈済アメリカ総支部の曾慈慧（ゾン・ツーフィ）副代表が厳粛に言った。

**感染予防と共に強奪も  
予防しなければならぬ**

八月下旬、アメリカ疾病予防管理センター（CDC）は、ハ

●瓦礫となったキャン・ペリン市の民家。住民は住む家を失った。

（撮影・ファン・ビン）

イチへの渡航勧告をレベル4に引き上げた。現地は医療資源が欠乏しており、人々の感染予防知識も低く、ワクチンの接種率が低い。如何に感染を予防するか。が最前線で活動する人にとって難題の一つである。アメリカの支援チームメンバーは全員ワクチン接種を終え、マスクの着用と体温測定を徹底することで個人の感染防止対策を行っている。

もう一つの難題は、軍や警察でさえも制圧できないギャングである。張さんによると、彼が八月二十一日まで南下できなかったのは、ギャングが主要道路を封鎖していたからだ。二〇一〇年のハ

イチ地震の時は、各救援団体は国連平和維持軍と米軍の護衛を受けていたため、ギャングは一線を越えることができなかった。今は外国の軍隊が撤退したため、救援物資を満載したトラックが間違えて彼らに封鎖された道に迷い込むと、略奪される可能性があるのだ。

このような高度な危険をはらんだ変化球に直面して、慈済ボランティアと協力パートナーは、一步一步着実に、且つ臨機応変に対応することにした。九月一日午後、アメリカのチームメンバーがポルトフランスに到着した時、慈済と赤十字社からの支援物資も同日にハイチ慈済

センターに到着した。また、慈済アメリカのボランティアによって梱包された六千五百個余りの家庭用医薬品セットもコンテナに積まれ、マイアミから船でハイチに向けて出港していた。

台湾とアメリカからの支援物資を受け取るほか、ボランティアは現地の仕入先と積極的に連絡を取ったり、ハイチ・カリタス基金会と配付に関する協議をしたりした。仕入先の協力の下に、大量且つ多様な食糧を確保し、一世帯あたり三十七キロの物資を用意することができた。それは、十二キロ半の米一袋と、豆やトウモロコシチップ、パスタ、マカロ

二、食用油などが入った二十五キロの食糧袋である。

被災地の飲料水の衛生問題を考慮して、慈済ボランティアは百ガロン（約三百七十八リットル）の水を浄化できる一パック二十錠入の浄水錠剤も提供することにした。慈済がそれを支那物資と一緒に梱包することを知った同行の現地カメラマンのケジャー・ジーンさんは驚き、そして喜びを表した。というのも、その浄水錠剤は普段から需要が高く、地震後には更に品不足になっていたからだ。「慈済の食糧袋を手にしたハイチ住民はきつと喜ぶでしょう。ハイチは長年飲料水の

## ■慈済の災害支援統計

慈済は、食糧、医薬品セット、即席飯、福慧ベッド、エコ毛布などの物資を順次ハイチに輸送したり、現地で調達したりして、被害の特に大きかった地域であるレ・カイ市とジェレミー市の14,000世帯に配付した。（9月中旬までの合計）

日付	協力パートナー	世帯数	支援物資
9月 3、6日	サレジオ会	2,000世帯	米2,000袋
9月 8日	ソイルス修道院	1,000世帯	米2,000袋
9月10日	ハイチ・カリタス基金会	1,250世帯	米1,250袋、 食料品詰め合わせ 1,250個
9月11日	サレジオ会	1,000世帯	米1,000袋、 食料品詰め合わせ 1,000個
9月15日	農業技術団	1,000世帯	米2,000袋

## ■ハイチ支援に関する出来事

1998年10月 ② ハイチ、ドミニカなどの国をハリケーン・ジョージが襲い、甚大な被害をもたらした。慈済基金会は6つの民間慈善団体と合同調査チームを作って、被害調査を行った。翌年、慈済は「中米を援助する・情のある人が寄り添う」という物資の援助を展開した。

2008年8、9月 ② 4度にわたってハリケーンが襲った。



## 2021年ハイチ地震と慈済の支援

8月14日午前8時29分、マグニチュード7.2の地震が発生した。震源地はハイチの首都ポルトープランスから120キロ離れた南西部で、浅層地震だった。地震で放出されたエネルギーは11年前にポルトープランスを破壊した大地震の2倍で、南西部各省に甚大な被害をもたらした。

死者  
2,207

負傷者  
12,268

家屋損壊  
約13万軒

支援を待つ人  
65万



ポルトープランスにある穀物問屋の倉庫では、支援物資の準備が着々と進んでいた。五千セットの物資が、赤、緑、オレンジ、黄色、青色の手提げ袋に分けられていた。住民が片手で下げられるようにと食糧を種類別に包装したのは、受け取る側のニーズに配慮したものである。

### もう住民を待たせてはならない

問題を抱えており、多くの人が汚れた水を飲んで病気になるって亡くなっています。慈済がそこまで考慮しているとは、実に心配りが行き届いています」。

慈済ボランティアと何日も共同作業をした穀物問屋の副総裁ダスカ・ベネツト女史は感動して、「あなたがたが自分の国を離れて、人助けのためにここに来たのであれば、私ももっと貢献すべきです」と述べた。

配付の準備に加えて、シニアボランティアたちは時間を無駄にすることなく、現地ボランティア向けの養成コースを展開し、彼らの疑問や意見を聞いた。また、今後の炊き出しに備えて、炊事担当ボランティアに、手早く即席飯を調理する方法を指導した。

しかし、変化球は次から次へとやってきた。

- 2009年1月 ▶ 慈済は「ハイチ人道支援・災害支援プロジェクト」を開始した。
- 2010年1月 ▶ 12日に発生したマグニチュード7.0の強震で、150万人余りが被災し、30万人余りが亡くなった。慈済は77日間にわたって、緊急支援、治療、大規模配付、食糧による労働支援活動を展開した。
- 2012年11月 ▶ 5日連続の豪雨で、第2の都市であるカパイシアンが深刻な水害に見舞われた。現地ボランティアが被害を調査し、単独で配付を行なった。
- 2013年5月 ▶ 支援再建した、ハイチのシスター・サン・エン教会の3つの学校が落成。
- 2013年8月 ▶ 台湾農業委員会に外国支援米を毎年申請し、現地の貧困世帯や障害孤児などを支援している。
- 2014年11月 ▶ ポルトープランスとカパイシアンで豪雨による水害支援が行われた。
- 2015年7月 ▶ ソリノ地区で支援再建したドリューシャール幼稚園が落成した。
- 2021年8月 ▶ 14日、マグニチュード7.2の強震が発生し、コロナ禍の中で支援活動が始まった。

ギヤングが道路を封鎖していたため、物資が予定通りに届かず、ボランティアは、九月八日の午前中にレ・カイ市のソイルス修道院と共同で行う予定だった大規模配付を、延期せざるをえないのではないかと心配した。しかし、連絡して分かったのは、修道女たちが既に一千世帯のリストを確認し、受け取る時のクーポンまで配っており、住民は当日に物資の受け取りを心待ちにしていたことだった。

用意した物資を安全に出荷できないため、災害支援チームは仕入れ先に、臨時に配付会場であるレ・カイ市近くで一千世帯が必要とする米を調達できないか、

と問い合わせてもらった。電話であちこちの業者に問い合わせた結果、やっと一袋当たり十二・五キロの米を二千袋調達できる現地の問屋を見つけた。

買い付けを完了したのは九月六日で、配付開始の九月八日朝まで四十八時間もなかった。二千袋の米が予定通り配付会場に到着できるか否かは依然未知数だった。

ハイチのギヤングは、ポルトープランスを封鎖し、九月六日は誰も外出してはならないとまで公言していた。ポルトープランスにいた災害支援チームは心を静めるしかなかった。「あの数日間、私は毎晩気掛かりで眠れませんでした」と

リーダーの陳健さんが振り返った。

今回の震災に対し、中華民国政府と慈済、そして赤十字社が力を合わせて二十五トンの物資を寄贈した。九月七日にポルトープランスで物資の寄贈式が行われ、慈済ボランティアは落ち着かない気持ちで出席した。ハイチのアリエル・ヘンリー首相は中華民国駐ハイチ大使の古文劍(グー・ウエンジエン)氏の同伴で出席し、国家元首の代わりにハイチ政府からの感謝の意を表した。式典後、慈済チームと現地ボランティアは当日の午後四時にポルトープランスから、百五十キロ離れたレ・カイ市に向かって出発した。

人員の安全を確保するため、一行はギヤングが支配する道路を避けて、わざわざ遠回りした。二手に分かれたチームがレ・カイ市に到着したのは深夜十二時近くだった。米を積んだトラックは早朝の六時に到着し、年配の修道女たちが奮闘してコンテナから積み荷を降ろした。熱心な信者たちも早起きして、一緒に重い米を配付会場まで運んだ。

異なる業者から購入した二千袋の米がすべて予定取りに到着したのを見て、何日間も心配していた陳健さんはやっと一息ついた。「私は、数えきれないほど配付活動をしてきましたが、配付する米





● 9月8日、レ・カイ市で配付活動が行われ、ボランティアは米をソイルス修道院の代表者に寄付した。警察が治安維持する中、人々は適時に届いた米を受け取っていた。(写真右上、右下) 被災地は食糧不足が深刻だが、食糧詰め合わせと米は、6~8人家族が1カ月生活するのに十分な量である。(写真左 撮影・范婷)



が当日の朝に到着するのは、今回が初めてです。今回の配付は正にミッション・インポシブルと言えます」。

## 長期支援のための幕開け

九月八日午前十時、予定した配付がやっと始まった。被災した住民は朝から学校の外で待ち、警察の厳重な警戒体制の下、秩序よく会場に入場した。人々は表情を崩して、二袋合計二十五キロの米を住んでいる所に持ち帰った。

「私は家が倒壊し、脚も怪我して、今日まで路上で生活してきました。震災後

は食糧の価格が暴騰しました。あなたたちに感謝しています。もつと多くの人がハイチを助け、私たちが再び安心して生活できるように力を貸してください」と住民のローズさんが期待を込めて言った。別の住民のアルフォンスさんによると、被災地は食糧不足で、人々は緊急に食糧を必要としているそうだ。「神がボランティアに力を与え、また戻って来て、我々を助け欲しい」。

被災者が緊急の食糧を得ただけでなく、ハイチの「慈濟二世」である若者も、奉仕する過程で人助けの喜びを感じた。「以前、ボランティアになりたいと思っ

たことがありましたが、父は私が若すぎると言いました。当時は十六歳でしたが、今は許してくれています。ここに来て力になれたことを嬉しく思います」とボランティアのジェニファ・オーソンさんが誇らしげに言った。

九月八日、配付が終わった後、慈濟のロゴが貼られた米と食糧袋がやっとなカイ市に到着した。支救チームは直ぐにカリタス基金会とサレジオ会 (Salésien de Don Bosco) と協力して、二千世帯余りに緊急支援の食糧を届けた。

住民は引き換えクーポンを手にして、和やかに列を作って順番を待っていた。

列が長過ぎるからといって焦る人はいなかった。物資を受け取った後、ほとんどの人は小型トラックのタップ・タップ（現地の乗合タクシー）に相乗りして帰宅した。それは、大きな二袋の食糧を持って、食糧が欠乏した被災地の街を歩くのとても危険だったからだ。

「今まで、ハイチでこのように秩序正しく、和やかで且つ互いに尊重し合う態度を保った配付活動を、見たことがありません。住民は重くても愛情がこもった食糧を受け取ると笑顔を見せました。今回の特別任務に我々も感動し、多くの家庭を変え、彼らに希望を与えることがで



●アメリカからやって来た支援チームメンバーは、養成コースを終えたハイチの現地ボランティアと記念撮影をした。リーダーを務めたシニアボランティアの陳健さん（左から2人目）がハイチにきたのは、今回で79回目である。

きました」。困難で危険な道のりだったが、仕入れと物流を担当したダスカ・ベネットさんは、慈済と行動を共にできたことをとても光栄に思うと言った。

シートでさえ、「豪邸」なのです。殆どヤシの葉や草でできたテント「区域もあります」。

「私を必要とする時は、必ず全力を尽くします。忘れないでください」。

地震から一カ月以上が経ったが、被災地の住民は帰る家がなく、食糧と医薬品不足は依然として深刻だ。支援チームのリーダーである陳健さんは、見るに忍びなかった。「今回、テント・エリアを視察しましたが、二〇一〇年の地震の後とは全く違っていて、今回はビニール・

慈済は引き続き、地元の教会関係者と密接に協力し、緊急に食糧を提供するほか、現地ボランティアの育成を続けていく。異なる宗教と協力して、善のエネルギーを集めることで、1＋1＝2以上の相乗効果を発揮し、被災者が震災後の困難を乗り越え、再び立ち上げられるよう力を貸している。

（慈済月刊六五九期より）

# ドイツ西部の水害 キッチンカーで復旧を応援

ヨーロッパ各国の作業員がドイツの水害被災地に入り、先の長い復旧工事を支援した。慈濟ボランティアはキッチンカーで彼らに食事を提供し、中華式の麺やご飯のメニューで彼らのお腹を満たし、いつもと違うコックが来て料理を美味しく調理したため、マイスターも満足して一括注文した。また住民もガスや水道の復旧を待つ間、温かい食事を摂ることができた。みんな毎日楽しみにしていたのだ——「今日のメニューは何だスゥ？」

## 朝

八時にオーストリアの国境を越えてドイツへ入った私たちは陳樹微

（チエン・シューウェイ）師姐（女性ボランティア）と合流し、私が九人乗りの小型バ

スを運転して、ドイツ西部の主要都市、ケルンに向かって出発した。一時間余り後にミュンヘン市に入る前から渋滞し始め、ノロノロ運転になり、午後になって、ドナウ河畔のウルムで昼食をとった。そのあと三百キロ走り走って夜になると、ようやくケルンに着いた。この日は一日で十二時間、約千キロ運転したので、少し自己満足感に浸っていた。まだまだ自分は衰えていない！

翌日の十時半、陳樹微師姐がヴァイラーズヴィスト市の社会福祉人員と連絡をとり、一軒のレストランで落ち合うことになった。その女性は、ドイツ各都市とオーストリアから来た私たちに、半月前に起きた水害について話してくれた。

七月十四日から雨が降り始め、次の日の朝方になって突然大洪水になった。その水の勢いは、まるでダムの放流のように、地勢が低い場所にある家々は瞬間に浸水し、住民は心の準備をする間もなく、洪水は地域全体にわたって農地、道路、樹木、堤防、車…を押し流した。

その後、私たちは幾日も被害が甚大な地域を視察し、バート・ノイエンアールやアールヴアイラ、バート・ミュンスターアインフェル等の町を回った。そこで目にした災害後の惨状は、言葉で形容できないほどだった。水の勢いは、河川の両側にある街道を覆い尽くし、家が基礎部分から流されてしまったため、大きな穴





が開き、電線、ガス管、水道管の全てが露出していた。商店街は無残にも歩道が泥まみれになり、店は内外共に破壊されてしまった。また、容赦ない洪水は、小さな橋すら見逃さずに破壊した。跡形もなく破壊されてしまった何軒かの家を目の当たりにして、住民は無事に逃げたの

だろうかと不安になった。

多くの家は歴史的建築物一覧に載っていて、二、三百年の歴史があるが、建材は現代のように頑丈ではなく、セメントというよりも、土と藁をこねたものでできた壁などは、洪水で溶けてしまった。石膏ボードの壁も洪水の侵食には耐えられず、天井も一緒に落ちてしまっていた。

最も心を痛めたのは、ジンツイツヒにある二十八名のお年寄りと身障者をケアしていた健康センターが被災したことである。洪水の勢いが増した

夜、救助隊員は先ず十六名の住民を安全な場所に避難させたが、再びそこに戻った時、すでに目の前で激しく水が流れ、水位は二階の高さまで上り、残りの十二名の住民は逃げられてしまった。

あの数日の視察から、すでに半月が経っていた

●慈済のキッチンカーは、パートナー・ミューンスター・アイフェル市の市政府広場に停車し、ボランティアが車の外に「今日のメニュー」を書いた小さな黒板を置いて、毎日1000から5000食を提供した。(写真の提供・林美鳳)



が、道中、空に鳥が飛んでいるのを見たことはなく、草地にも野生の小動物を見かけなかった。その様子から、当時の雨足がどれほど恐ろしいものだったかが想像できよう。

さようならを言うのが名残惜しい

被害が大きかった地域では水道、電気、ガス管のどれもが破損していて、住民は

●街の中心を流れる小さな川が洪水の猛威を振るった。道路のアスファルトを削り取り、家々の壁をもぎとった。家の外観は変わってはいなくても、浸水した基礎部分のコンクリートは脆くなり、居住には適さなくなった。(撮影・劉晃汶)

三食を作ることもできなかつたため、支

援者団体がキッチンカーを出して、ドイツソーセージやフライドポテトを提供していた。被災者と作業員はすでに二週間も同じ食べ物で口にし続けていたので、八月四日、私たちがバートミュンスタールアイフェル市を訪れた時、ザビーネ市長が慈済にそれまでと異なる昼食を提供してもらえないかと提案した。

八月六日午前中、災害視察を終えて帰る途中にフランクフルト市を通った時、樹微師姐がケルン市にある特殊用途の自動車工場と連絡が取れたというので、私たちは直ちにケルン市に引き返し、その工場へ移動式キッチンカーを見に行き、

その場でリースすることを決めた。

そのキッチンカーには、コンロが四つ、シンク、冷蔵庫、オープン、換気扇、作業台などが全て揃っていた。八月十二日、ボランテニアが再びバートミュンスタールアイフェル市に向かった。キッチンカーの性能を十分に理解した後、八月十三日、初めてキッチンカーで食事を提供することになり、ドイツに住んでいる三人のシェフ級のボランテニア、楊文村（ヤン・ウエンツン）師兄（シーシオン）、林森喜（リン・センシー）師兄、廖連煌（ミウ・リエンホワン）師兄が調理を担当し、二百食の菜食焼きそばを提供した。

ドイツ各都市やオーストリア、オラン



だからボランティアが交代で手伝いに来てくれたので、住民もバリエーションのある料理に新鮮さを覚えたそうだ。八月

二十一日、オーストリア・ウィーンのボランティアチームは劉建国（リウ・ジェングオ）師兄を先頭に、各種調理器具と調



## ドイツ西部の水害 慈済の災害支援

7月中旬

・豪雨が西欧諸国を襲い、ドイツ、ベルギー、オランダは極端な降雨量を記録した。24時間に現地の平年の1カ月分を超える雨が降った。

・ドイツ西部ノルトライン・ヴェストファー

レン州とラインラント・プフェルツ州は河川が氾濫して町に浸水し、土石流で建物が倒壊し、死者170人余り、避難した人が数万人に上った。ドイツ気象庁は「世紀の大水害」と発表した。

8月3日～5日

・ドイツ・ハンブルク、ミュンヘン、フランクフルトとオーストリア慈済人は西部の大都市ケルンで合流し、多くの被災地を視察して、ノルトライン・ヴェストファーレン州のバートミュンスタールアイフェル市を重点ケア区域に定めた。

8月13日～9月11日

・ケルン南方のバートミュンスタールアイ

フェル市は、古城のある風光明媚な歴史ある街だ。人口は約1万7千人で、住民の生活は観光業と小規模の家内工業が主だが、洪水は家屋と経済活動を破壊し、推計で2千5百世帯が被災した。市長によると、今回の水害は第二次世界大戦以来最も深刻な被害をもたらしたそうだ。

・軍隊、エンジニアチーム、民間団体が被災地に駐屯して復旧に協力した。簡単な食事だがボランティアが炊き出しをして人々に寄り添い、励ました。

・ボランティアはドイツのハンブルク、ミュンヘン、フランクフルト、ケルン、そしてオーストリア、オランダから、合計延べ3030人を動員した。

・提供された食事：10021食。





味料、米とパスタを携えて出発した。食事を提供する前、キッチンカーの前にある自転車置き場と市役所前の長テーブルや椅子を臨時に置く場所を綺麗に掃除したので、清潔感あふれる環境になったと良い評判をもらった。

住民は慈済の菜食を絶賛し、鍋を持参して昼食用に持ち帰る人もいた。食事を提供していた時間はまるで小さな食事会のようで、とても賑わった。この食事提供サービスは九月十一日に最終日を迎え

●ドイツ政府は規定を緩めたので屋外でマスクを着用する必要がなくなった。各国から来た作業員は、被災地で温かい食事をとれることに感謝し、慈済が広めている菜食は地球にとって有益だと賛同した。(写真提供・林美鳳)

た。私たちがキッチンカーでそこを離れた時、多くの人は名残惜しく思い、慈済の美味しい昼食やあの和気藹々とした雰囲気をおぼろげに覚えている。最後にコンロの火を消したのが私

なくて良かった。なぜなら、彼らの悲しむ表情を見るのは辛かったからだ。災害後の復旧作業は、二年もかかると予想されている。さようなら、友よ！また会う機会まで。(慈済月刊六五九期より)

## 年を重ねても、幸せを感じる

文・游月英  
(オーストリア慈済ボランティア)

一年半以上になるコロナ禍で、ヨーロッパ慈済人の活動は止まってしまいがち、今年の七月上旬に、ようやく再度セルビア難民キャンプへケアに行くことができた。嬉しかったのは、夫の劉晃汶(リウ・ホワンウエン) 師兄も同行し、ヨーロッパ慈済所属の車の運転を担当し

てくれたことである。七月中旬、ドイツは百年に一度と言われる水害に見舞われ、私たちは再び被害視察を行った。八月初め、ミュンヘンからグラサウに向かい、陳樹微師姐と合流して四日間の視察活動を行ったが、心を大きく揺さぶられた。そこでは證嚴法師が口を酸っぱ

くして言っている「時間がない、時間がない」という言葉が思い起こされた。

被災地は断水と停電が続いていたので、チームはまず温かい食事を提供し、被災者と復旧作業員の心身を温めることを最優先にした。そして、素早く行動に移して帰路にはキッチンカーを選定し、ウィーンに帰った三日目には、陳師姐と共にキッチンカーをリースしに行った。劉師兄は迷うことなく運転を引き受けてくれた。

劉師兄の以前の職業は、船の機械エンジニアだ。キッチンカーを運転するのは初めてだったが、すぐに使用方法を習得した。一回目の炊き出しを担ったハンブルクの三人の師兄に、キッチンカーの機能と使用方法、注意事項を伝え、全ての

手はずを整えた後でウィーンへ戻り、炊き出しをしてくれるボランティアを募った。その時コロナ禍で外出できないという返事が大部分だった。

ボランティアがいなかったらどうすればいいのかと焦っていたところ、一本の電話が入った。それは、劉建國師兄と一緒にシェフとして参加し、陳秀花(チェン・シウホア)師姐が調理補助をしてくれる、という連絡だった。私は安心して、応募リストにオーストリアが二回目を担当する、と記入した。

八月二十二日から一週間、私たちは毎日異なる菜食料理を提供した。以前中華料理のレストランを開いたことがある私たちからすれば、外国人が好む味は分

かっており、中華風焼きそばにもやしサラダ、キムチ、トマトの卵炒めにガルバンゾを加えたものなど、タンパク質、カルシム等の栄養に気を配った。多くの人が食事を取りに来て、毎日五百食以上も提供した。オーストリアからの五人のボランティアは疲れ切っていたが、住民と作業員たちがみな親指を立てているのを見ると、疲れは吹き飛んだ。

八月二十九日、ハンブルクのボランティアが三回目を担当することになったので、私はそこに残ってサポートした。その後、九月十一日に終了して十三日にウィーンに戻った。

「前例のない」今回のキッチンカーによる炊き出しに参加でき、高齢ながら私は

とても幸せだった。八月初旬から九月の半ばまで、千キロの道のりを六回往復して二十三日間、炊き出しを担当した。毎朝七時過ぎからスーパーで必要なものを買うと、急いで食材をキッチンカーに持って行って準備し、八〜九時間立ち続けた。四十六人分の大きな電気鍋で、オーストリアボランティアが担当した週は毎日七から八回、ご飯を炊いた。十一回炊いた日もあった。チームの中で私が一番年長だが、体力はほかの師兄師姐の誰にも負けない。奉仕できる体力があることに感謝している。人生は無常なゆえに、片時も無駄にはできない。そして私を愛し、この輝かしい菩薩道を歩むことを優しく見守ってくれる家族に感謝している。

【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・林淑女

## 蛍は群れを成してこの世を照らす

ひとしずくを軽く見ないこと、また、自分も軽視しないことです。

蛍の光は微弱であっても、群れを成せば暗闇を照らすことができます。

お互いに励まし合って、愛で世界を覆いましょう。

### 毎

年のこの頃、溢れる感謝と敬虔の思いになります。去りゆく

年の平穩無事に感謝し、さらに敬虔な心で新たな年を迎えたいものです。

毎日のように目を開けた瞬間、私の心にあるのは「感謝」の一言です。

手足を動かし、息を整えてからベッドを下り、両足を地に着け、体を真っ

直ぐにして立ち、足を踏み出して歩きます。その全ての動作がいつもと変わらないという平穩に、私は改めて感謝するのです。なぜなら今日もまた、この世のために行動することが出来るからです。

命は一呼吸する間にあり、一秒一秒がとても大切なのです。時間と人の命は密接に関わっているのですが、人は時間に対して無関心です。時は金なりと言われますが、人は平等にその光陰に恵まれているのですから、





大切にし、感謝して正しいことをするべきです。心にある福田に善の種を蒔いて大切に耕せば、人生における功德の林となるのです。

もし、ぼんやりとして、何も知らずに一生を過ごせば、善が僅かで、悪がとて大きく占めるかもしれません。自分の人生を振り返ってみてください。人生の中で、最も価値があったのはどんな事だったのか、どれだけ人を利することをしたか、これが私たちの生命の価値です。

人生の価値を振り返ってみて、生

して働くようになりました。一日あたりの収入は現地貨幣の千九百チャット（約百三十円）です。彼も布施したいと思い、力仕事で得た工賃の半分を献金しました。なぜなら彼は自分よりも貧しい人がいることを知っていたからです。

人助けをしたいという善念とこの工賃の半分（約六十五円）には、とても大きな価値があります。人助けするのはお金持ちだけでしょいか。救われる人は貧困者に限られたことでしょうか。そうとは限りません。善

命が役に立ったのであれば、自分に対して感謝し、まだできていないのら、直ちに始めれば間に合います。今、何歳かを気にする必要はなく、まだ奉仕する力があるならば、やれば良いのです。そうすれば、生命の価値が増します。

コロナ禍の期間に、ミャンマーの慈済ボランティアと慈青たちが農村部へ配付に行った時のことです。三輪車夫のウオンミペさんは、以前は一家を養うことができたのですが、観光業が不景気になってから、運搬工と

行しようと思っても、受け取ってくれる人がいなければ、身辺に物資がいったいあっても、何の用もなさないので。必要とする人がいれば、私も施しをすることができ、お互いに喜べるのです。良いことをするのはお金持ちの権利ではありません。手足を動かせば、全てこの世を利することができのです。

人助けをしない人は心豊かになることはありません。喜捨する気持ちで奉仕すれば、貧しくなったと感じることはありません。ある「米貯金」

に呼応したミャンマーのお婆さんは、ご飯に水だけという貧しさにあっても、毎日ご飯を炊く時、その手で握りのお米を分けて、人助けをしており、そこに彼女は喜びを感じています。人々はその姿に心打たれ、共感を覚えています。

一粒の米だけでも、真心をもって奉仕すれば、そこには功德があるのです。もし私たちの社会の誰もが僅かでも力を尽くせば、世の中は貧困で飢えに苦しむ人が大きく減るでしょう。貧（ひん）と貪（どん）という字は、

れはまるで天下にまたたく蛍の光のようです。絶えず暗闇を照らし、地球に愛を敷き詰めています。

また、自分を軽んじてはなりません。蛍が一匹や二匹では明るくならなくても、群れをなして同時に飛び立てば、道を照らして人を導くことができます。群れを成す蟻も須彌山を登る志を持つことができるように、愛が結集すれば、至る所で福を造ることがができます。「観世音菩薩聞聲救苦（観世音菩薩は苦しみの声を聞けば救いの手を伸ばす）」。今の私たちは、「千

僅かに違います。考え方を変えて消費を抑え、福を多く造り、日々小銭を貯めても生活には影響しませんが、それが集まれば人間（じんかん）に大きな福をもたらすことができます。

ひとしづくの力量を軽んじてはなりません。慈濟は五十五年前に「五十銭」から始まり、互いに励まし合い、災難があるとすかさず奉仕し、生活に困っている人には長期ケアをしました。今日までの慈濟の足跡を、台湾を起点に世界地図で見ると、そ

処祈求千処現（千の所で救いを求められれば、千の所に現れる）「まではまだできていませんが、発心立願して、行ける所なら必ずたどり着かなければなりません。世間の状況をよく理解して、人々の苦難に関心を寄せ、日々善念を絶やさないことです。善行して、人助けをするのだ、と自分を祝福する人が福を造るのです。福のある人は魂と生命を永遠に輝かせることができます。皆さんも益々精進なさってください。

（慈濟月刊六六一期より）

## 私のホームレスチャイルド

阿侯にとっては街角が彼の家で、「オバサン」たちは彼の別の意味での家族である。彼が拗ねると、「オバサン」は彼を叱る。「あんたが健康に気をつけてくれないと困るのよ。私たちも若くないから、後は誰があんたの世話をするの？」

### 若

い阿侯は一日中街をブラつく。ひどく汚れた服を着て、足に履いている草履は汚れて色が分からないほどだ。歩くと左右のバランスが取れず、体が揺

れる。彼は、いつもは静かだが、たまに大声を出し、道行く人をびっくりさせる。定住先がなく、昼間は街中を彷徨い、夜はアーケードや建物の隅で過ごす。

一九九六年に、基隆信義区東信路の慈濟リサイクルステーションが設立され

はお粥だけど、食べるのを手伝ってくれる？食べる？」と言った。

た。毎月一回のコミュニケーションが設定されているが、ボランティアが彼にリサイクル活動を一緒にやろうと誘っても、いつも拒否される。ボランティアは彼に合う服を見つけ、洗ってから、着替えさせた。

かなり頑固な彼は、もしボランティアが「お粥一杯上げるよ」と言ったら、きつと拒否するだろう。食べるのを手伝ってくれるよう頼めば、引き受けてくれるのだ。ボランティアたちと知り合ってから、彼は人と挨拶するようになった。

それ以来、彼はリサイクルボランティアの家の前を通る時、ガラス戸越しに大声で「オバサン！」と彼なりの挨拶をして行く。それでボランティアが扉を開けて「今日は朝ご飯を食べたかい？今日

近所の人は、彼の変化を見て、暖かい手を差し伸べ、受け入れるようになった。彼が人を傷つけたりはしないと分かって、彼と話をする人も多くなった。

二〇〇七年の夏、ボランティアの呉東





満さんが阿侯の側を通り過ぎた時、彼に呼び止められた。「オバサン、僕は死ぬかもしれない。三日間もおしっこが出なくて、気分が悪い」と言った。呉さんは、直ぐに彼を近くの診療所に連れて行き、その後、大病院を紹介された。盲腸破裂と診断され、緊急に手術する必要がある。しかし、彼は身分証明書を持っていなかったし、自分が誰なのかも言えなかったため、どうしたらいいのか分からなかった。ボランティアは医師に、後で必要書類は補填するから先ず治療をしてほしいとお願いした。

阿侯は入院中、退院して帰宅したいと

言い続けた。しかし、彼の家はどこにあるのだろうか？退院した後は、どこで療養したらいいのか？ある隣人が倉庫の隅を空け、折りたたみ式ベッドを取り付けると言ってくれた。また、別の隣人は体力をつける栄養品と食べ物を提供すると言った。彼は言葉にすることはできないが、彼の目付きは柔らかく、人を見ると口角に笑顔を浮かべるようになった。

阿侯の身分証明書を申請するのが最も急を要することだった。訪問ケアボランティアは、以前の彼の隣人を訪ねたが、何も分からなかった。そこで、警察署と市役所の支援を得て、彼の本籍資料を探

し出し、その線を辿って遠い親戚と連絡を取ることができ、阿侯本人に間違いがないことを確認してくれた。

この証明書を手にボランティアは、身分証、健康保険カード、身障者カード、低所得証明などの手続きに奔走した。それによって政府からの毎月の補助金で彼は生活していくことができるようになる。

●ボランティアの呉東満さん（ウー・スーマン）（右）は、母親の心で阿侯（左）を世話し、彼を連れてリサイクル活動をしている。

## 見よう見まねで、任務を達成

阿侯は体力が徐々に回復し、たまに呉東満さんについてリサイクル活動をやるようになった。暫くして、彼は自主的に決まった店舗から資源の回収をする任務を始めた。

毎週水曜日の午後三時、彼はカートを押して飲食店の前で待ち、四時半にシャッターが開くと、直ぐ中に入り、倉庫に向かう。段ボール箱やオイル缶、ペットボトルを分別し、カートに積んでから縛って、分別する場所に行って整理する。

飲食店のオーナーから従業員まで、皆彼を褒め、よく飲み物を出してくれる。

ドライクリーニングを経営して二十年以上になる王文祥（ワン・ウェンシアン）さんと黄素媛（ホワン・スーユエン）さん夫妻はこう言った。阿侯は随分変わり、服装もきれいになり、積極的に、お年寄りのゴミを出す手伝いをしたり、ホームレスにいじめられているお年寄りを見かけると、助けたりする。リサイクルステーションは、彼が整理してきれいになり、悪臭も野良猫も鼠もいなくなった。実に素晴らしいことだ。

先日の医師の検査では、阿侯は知的障害だったため、自立能力がないと診断された。二〇二〇年に身体障害者手帳の更新時に再度鑑定した時は、知能が向上していたことに医師が驚いたが、意識障害の症状があり、薬を服用しなければならぬと言われた。薬の副作用で阿侯は眠気を催し、気分も悪くなるため、彼は服用を嫌がった。ボラントイアはいつも「あんたが体を大事にしてくれなければ困るのよ。私たちはもう歳だから、誰があんたの面倒を見るの？」と言って聞かせる。彼はその

時には何も言わないが、時には「何でもないのに何で薬を飲まなければならぬの？」と口答える。

呉さんは阿侯と自分の子供のように接している。彼の姿が見えなくなると、心配でたまらなく、あちこち探し回る。彼が情緒的に不安定な時は、苦勞して彼を説得し、リサイクル活動に連れて行く。彼に福を大切にし、福を積むよう教えている。長年、呉さんは一度も諦めたことはなく、彼女はいつも「行動に移せばいいのです」と言う。

（慈濟月刊六五〇期より）

# 子供がペットに出会った時

## 問

子供がペットを飼いたいとせがんだ時、どのようにして「飼う」というこの言葉の真の意味と生きている命に対して責任を負うことを理解してもらえるでしょうか？

答・ どういうわけか、かなり多くの人  
は「ペットを飼う」ことに魅力を感じる  
ようですが、私もその一人です。まずペッ  
トは可愛いですし、その上遊び相手や話  
し相手にもなるからです。

テレビでペットが飼い主に甘えてい  
る場面を見ると、思わず「私も飼いた  
い！」と大声をあげてしまいます。そ  
の時、私の夫はとても慎重にこう言  
います。「飼いたいと言うが、えさを与え、

散歩に連れて行き、ワクチンの接種や  
シャンプー、グルーミング、そして病  
気になったら獣医に連れて行く時間は  
あるのか？それから寝床も清潔に保た  
なければいけない」。これらの問題を考  
えると、まるで頭上から冷たい水を浴  
びせられたようになり、願望はたちま  
ち覚めてしまうのです。

子供がペットを飼いたいと言い出し  
た時、先ずそういう問題を伝えるべきで  
す。それによってペットの命を尊重し、  
飼うなら一切の責任を負わなければな  
らないことを分からせましょう。こん

なに多くの面倒な事があると聞くと、親  
に手伝ってもらおうようねだるかもしれ  
ませんが、その時は絶対に妥協しては  
いけません。少しでも引いてしまうと、  
子供に責任を逃れる機会を与えてしま  
い、結果的にそれらは親の仕事になっ  
てしまいます。ですから、あらかじめ  
話し合っ暗黙の了解の下に罰則まで  
作り、一つでも自分でしなければ罰せ  
られるよう、決めておくのです。

多くの親は、子供のおねだりする、上  
目遣いの目付きに耐えきれず、ペット  
を買ってしまいます。そのため、子供





はペットと遊ぶばかりで、責任を持って世話をしません。最初は可愛いと思っても直ぐに飽きてしまいます。それは子供がペットを飼う責任感も生命を大切に作る気持ちも育むことはできません。

## 笑いと涙の光陰

親友とその二人の子供は犬が大好きで、子供は犬の散歩やトイレの世話をし、ペット美容院にも親と一緒にいきます。犬が病気になった時、病院に連

れて行って、親と交代で看病し、重篤になった時は犬のために祈っていました。往生した後は納骨堂に納め、今でも皆でよくお参りに行っています。全ての過程は、親だけで行うのではなく、子供も終始参加していました。それは、家族全員が犬に深い愛情を持っていたから出来たことです。

私の二人の子供は、学校の自然科学の授業で、蚕を飼育して、観察してレポートを書いたことがあります。その過程で、桑の葉をどのように洗って乾かし、取り換えたらいいかを教えました。そ

して蚕が繭を作り、蛾となって幼虫を生んで、往生するまで世話しました。蚕が死ぬと、ティッシュでそれを包み、植木鉢の中に葬って、蚕にさようならと声をかけました。

その頃、亀と魚も飼っていました。子供は家に帰ると直ぐにペットにあいさつして話しかけるのです。しかし、暫くすると、ペットが病気になり、子供はとても心配し、クラスメートと一緒に、どう世話すればいいのかを相談しました。子供たちは丁寧に水槽を洗い、一週間に一回、亀を日光浴させました

が、それでもその小さな命を救うことができず、さようならを言うしかありませんでした。子供たちは小さな顔いっぱい悲しみを湛え、それ以降、二度とペットを飼いたい、と言わなくなりました。

### 買う代わりに里親になる

親子で話し合った結果、やはりペットを飼うと決めたのであれば、子供の年齢に合わせて動物を選ぶことを勧めます。子供が幼い時は先ず小動物を飼いましょう。例えば魚、亀：世話が少

なくて済みます。少し大きくなってから初めて猫や犬を飼うといいでしょう。できるだけ、買う代わりに里親になり、多くの飼い主のいない動物に心温まる家庭を見つけてあげることです。或いは、最初に「動物中途之家（保護犬・保護猫の収容保護・譲渡施設）」でボランティアとなって世話すれば、愛の奉仕を学ぶだけでなく、動物の世話を経験することができます。その後でペットを飼うかどうかを考えれば、子供はそのプロセスの中で生命を尊重する意義を学ぶことができます。

（慈済月刊六四二期より）

聞・思・修

仏法をよく学び、心に染みわたらせ、しっかりと実行する！

文・梁嬌親（慈済基金會慈善志業發展処職員） 訳・江愛寶

挿絵・凌宛琪

## 一番見え難いのは自分

快適な状況に置かれていると、一番直視したくないあの「私」は見えない。自分の足りなさを認めるのはとても辛いことである。

正直に自分を見つめることは堪え難いが、不思議なことに、自分を癒やす力がだんだん生まれてくる。

# 母

が病気になった時、私は十三歳になったばかりだったが、人生

の長さはどのぐらいか、どうしたら後

悔を最小限に抑えることができるか、どのようなすれば意義のある生活ができるのか、と考えた。母の闘病生活と最

近出会った難病患者との触れ合いから、法師の言葉を思い出した。「生命の長さは把握できなくても、自分を深めて人間の幅を広げることができる」。

難病を患った大学生は、本を出版したいという願望を持っていて、慈済チームの協力によって実現できることになった。ボランティアの「安心して！」という眼差しは、まるで彼に「怖がらないで、私たちがいるから。慈済はずっと寄り添うから」と語りかけているようだった。私は彼の純粹な目が、心から感激して輝くのを見た。ボランティアたちの善意と

温かさに私まで感動した。

彼の健康は日に日に下り坂になっていたが、彼は積極的に生き、病気という小悪魔と平和に共存していた。彼は率直に体の欠陥に向き合い、あらゆる訓練に適応し、自分を陶冶してくれるどんな機会も逃がさなかった。彼は、ずっと自分に温かく寄り添って、全ての難関を突破できるよう支えてくれた人たちに感謝した。

訪問ケアが終わり、花蓮に帰る汽車の中で彼の太陽のような笑顔がたびたび私の脳裏に浮かび、自分が違った道を



歩み始めた諸々を振り返った。父と母の人生の終点が私と姉に修行を始めるよう啓発してくれたので、快適な生活に別れを告げ、二〇二〇年に静思精舎に来て、毎日、それまでしたことない多くのことを学び、多くの人と接する生活環境に慣れるよう努力した。

その時から次第に「我」を捨てて団体に溶け込み、欲望が少なくなり、あらゆる取るに足らなかつた喜びがその瞬間に輝き出し、それによって一枚一枚と脱皮し、悟りに向かった。

證嚴法師は、「私たちの前に現れるあらゆる出来事から、私たちは



学び、受け入れ、理解しようとするのです。これらを経験しなければ智慧は成長しないので、耐え忍ばなければなりません」と開示した。私は難病の青年から真実の自分と向き合うことを学び、勇敢に完璧でない自分を受け入れた。自分に対して誠実になった時、直視したくなかった「自分」や一番認めなくなかった欠点、一番堪えられなかった心の鬱が見え始めた。

修行はまるで玉ねぎの皮を剥くように、一枚一枚深く自分を認識していく。一枚剥き終わると、修復し、また一枚

剥けば、辛い感覚が飛び出して抵抗する。自分の足りなさを認めることは非常に辛いことである。精舎に戻って修行しに来なければ、私はずっと自分の快適な状況の中にいて、自分が見えないままになっていただろう。

法師の教えと精舎の尼僧たちが、包容力のある環境の中で、次第に自分の核心が見えて来るのを手助けしてくれたことに感謝している。一朝一夕に成長することはなく、段取りを踏んで、仏法で現実の自分を認識すれば、後戻りしないだけでなく、逆に、より大きな

勇気を持って前進し続けることができなのだ。二度とたやすくネガティブな感情に妨げられることなく、試練に遭った時は全てに感謝すれば、不思議と自分を癒やしてくれる力が生まれてくるのである。

誠実と感謝は、私がああ難病の青年から学んだ貴重な贈り物である。人にはそれぞれ特性があり、模索と挫折の中から生命の価値を探索し、知らない間に無数の「不可能」を経験する。そして、試練を受けた後、希望の光が見え、益々良い方向に向かって歩んでいることに

気づく。

著名な作家である張曼娟（チャン・マンジュエン）さんは、「生命とは永遠の堂々巡りに過ぎず、あなたを初めに戻すためにあるのです」と言った。私と姉は既に初めに戻って歩んでおり、歩みながら発心、立願し、日々、より大きな慈悲心を育くんている。他人への奉仕と貢献から仏法の真諦を体得することで、自分で立ち上がり、周りの人を感動させて、共に益々良い菩薩道を歩むことを願うようになる。

（慈濟月刊六五〇期より）

# 善行に尽くす社長 病院用ベッドを担ぐ

元はバリバリの営業マンだったが、今はリサイクル福祉用具を配送する「お節介」ボランティアである。「お客様」はケア世帯で、「彼らの笑顔を見るために、一所懸命やらないといけない！」と言った。

**小**型トラックをゆつくりと走らせながら、運転に集中する謝國榮（シャ・グオロン）さんは、若い時に営業をしていた時に、あちこちにいるお客さんを訪

ねるために身につけた「道探しの技」を発揮し、GPSを使わなくても、街のあらゆる路地を自由自在に行き来できる。

「もしもし、福祉用具を申請したいの

ですか？あとで、オンライン申請書を送ります。少し待っていて下さい！」一台のスマホとトラック一台が彼の移動オフィスである。毎日、リサイクル福祉用具を回収したり、届けるだけで忙しい日々を送っている。午前中だけで何度も携帯が鳴り、一旦出かけると、帰宅はいつも夜になり、その翌日早朝には告別式や助念に出かけることもある。

六十五歳の謝さんは高齢者の仲間入りをしたばかりだが、平日は自分の仕事の合間に、ボランティア活動に情熱を注い

●謝國榮さんはトラックから病院用電動ベッドと車椅子を下ろした。一日も早く貧困世帯の負担が軽くなればと願いながら。（撮影・蕭耀華）



でいる。年齢では「年寄り」にあたるが、しっかりした足取りと元氣いっぱいな様子から、全く年齢を感じさせない。元会社社長が、今は全く違う「お客様」と向き合っている。

## 暮らしの改善

### 小さな営業マンの願い

貧しい家庭に生まれた謝さんは、十人兄弟の中で育った。幼少期で一番印象に残っているのは、「お腹を空かし、冬に寒さを凌ぐ服がない」ことであつた。退役後は、家の暮らしを改善しようと、

境を改善すること」で、十分な経験を積んだ後、彼は会社を辞めて起業した。水道、電気、木工、塗装などの工事をする人材を育て、お客様との商談から施工の監督まで励み、あらゆる事を自分でこなした。

「内装の仕事は思っている以上に難しいのです。例えば、クーラーの配管をどのように配置すれば美観も損なわないか？です。とても大事なことです」。細かいところまで見逃すことなく、良いものを作るために、時には損をすることがあっても構わず、品質にこだわり続けた。彼は冗談混じりに、「自分はこんな性格

セールスの仕事を始め、高価な事務機器を販売した。当時、受けた訓練のことを笑いながらこう話した。「店に来たお客さんにポケットのお金を使ってもらえるまでは帰らせないというもので、いわば売り場の『殺し屋』を養成するようなものでした」。

謝さんは事業に打ち込み、学びと成長を怠らず、自分の力で短期間に管理職の座に就いた。どのように売り込むかを覚えた後は、建設会社に職を変え、営業部長にまで上り詰め、一人で十数件の建設案件を任される能力を持つまでになった。

子供の頃の願いは「商売をして家庭環

だから、あまり儲かりませんでした」と言った。

一介の営業マンから営業販売部のマネージャー、そして会社の社長になった彼は、商売を通じて多くの人と関わり、客の要望を上手く聞き出して、それを業績に繋げていった。しかし、貧しい家庭に育ったことから、常に人助けをすることを忘れず、積極的に慈善活動に参加するようになった。

「九二一地震の時、初めて身近に『慈濟』という慈善団体と触れ合う機会に出会いました。当時、多くの地域の人が、慈濟ボランティアを深く信頼していた



ことに気づきました」。慈善団体と一緒に被害の大きかった中部の被災地に向かった。謝さんはボランティアが霧峰地区で被災者のために仮設住宅を建てているのを目にして、自分がやってきた建築の仕事を活かして被災者を支援することができればと思い、自分から慈済台北支部に連絡を取り、そこから慈済との縁が始まった。

「慈済に入ってから、最初に参加したのが医療ボランティアです。一回で平均して三〜四日、最も多い時で年に二十七日参加しました」。医療ボランティアを始めた時のことを振り返り、「オンラ

蓮の加湾部落を訪れ、部落の若い人たちが木工を学ぶのを手伝った。例えば、椅子、ベンチ、棚など簡単な家具造りから始め、部落の人たちが手に職をつける手伝いをし、そこから彼らが安定した仕事を見つけられることを願った。彼は花蓮までの往復を苦に思わなかった。

## 善行プラットフォーム 行動すれば、感動がある

「ある時、支援を求めている人から電話が入り、あまりに急いでいたので、バックして駐車する時、後ろを柱にぶ

イン予約」システムはすでに導入されて久しかったが、多くのお年寄りにとって操作はやはり難しく、「朝の四時、五時頃から、カウンターで予約するために、病院の外で待っているお年寄りたちがいました」。このような状況に遭遇した時、謝さんは根気よく一人ずつお年寄りの予約の手伝いをした。彼は仕事で培った忍耐と気配りを慈善活動に取り入れ、相手のニーズに合わせて、より適切な確かな人助けをした。

二〇二〇年、政府が慈済と協力して進めた多元的就職方案において、謝さんは木工部門の指導を任された。定期的に花つけたことがあります」。謝さんは気まぐすそうに笑いながら、「恥ずかしい体験」を話してくれた。その様子から、どんなことでも自分にできることはまっすぐにやり遂げる人だということが分かる。

中年になってからボランティアに参加するようになった彼だが、その積極さは若い時のセールスでの意気込みと変わらない。「福祉用具の回収と配送はもう十五年も続けています！」二〇〇六年、彼は、ある慈済ボランティアが古いトラックに老いた母親を乗せて、申請者の元に病院用ベッドなどの福祉用具を届けているのを見てとても感動し、心の中で



「自分も病院用ベッドを運ぼう」と思った。

その年から、リサイクル福祉用具を必要としている家庭に届けることを自分の役目としてきた。過去の輝かしい実績と面子へのこだわりで、輸入車や有名ブランド腕時計などで自分の身を固めていた彼が、地域の訪問ケア、人医会の施療、福祉用具の搬送などの過程で、生と死や出会いと離別を目にしたことで、車を小型トラックに変えた。今ではペンキの剥がれた古いトラックは、空で福祉用具を取りに行くか、消毒して修理された福祉用具を満載して、何年も各地を走り回って来た。一番長い距離を移動したのは、台北から屏東

に行った時だった。

自分の名前の中国語の発音が、一九七〇年代の有名なアニメ「マジンガーZ」の台湾版の主役「国隆（グオロン）」と似ていることから、あるボランティアが冗談混じりで、謝さんはまるでマジンガーZのようで、体力もボランティア精神も無敵だから、と言ったことがある。「一度やると決めたら、ちゃんとやりたい、というのが私の性格です」。

「慈濟は、『善行するプラットフォーム』のようなもので、多くの人を助ける機会を与えてくれます」と謝さんは言う。このように実際に行動して、奉仕する機会があるからこそ、やればや

るほど投入するようになったのだそうだ。彼は自嘲気味に、「自分はどちらかというと『お節介』ですから、自分の出来る範囲内で、より人助けができればと思っています」と言った。

今の彼は、建設現場に足を運んで工事の進み具合や品質のチェックをする以外に、時間を見つけて助念に参加したり、花蓮に行って木工クラスを教えたりしている。しかし、一番時間を費やしているのは、慈濟のリサイクル福祉

●謝國榮さんは、花蓮加湾部落の青年に木製家具の作り方を教えているが、手に職をつけられるよう願っている。（撮影・呉金圳）

用具プラットフォームの仕事である。

二〇一七年を皮切りに、慈済のリサイクル福祉用具プラットフォームが各地で立ち上げられ、申請の受理、修理、配送は全てボランティアが担っているが、需要がますます増えるにつれ、ボランティアは申請者たちを待たせたくない気持ちで、申請書が届くと直ちに連絡を取って、車で回収や配送をするようにしている。たとえ、自分の仕事が忙しくても、謝さんは自分で福祉用具を申請者に届けることをモットーにしている。なぜなら、リサイクルした用具を再使用すれば、経済的に余裕のない人たちの負担を減らす

ことができると共に環境にも優しいことを知っているからだ。

「もつと大事なのは、プラットフォームを通して慈済の温もりを届けることです」。申請者が福祉用具を受け取った時、心から感謝する。その温かいやりとりを見ていると、その全ては、ボランティアがやり続ける強力な支えになっていることが分かる。

### 妻と家族に感謝

#### 長い道のりでも前に進める

長年、リサイクル福祉用具の流通に携

わって来たが、近年ようやく多くの人に認識されたり、注目されるようになった。謝さんは、もつと精を出さないといけない、と言った。

毎日早朝に出かけ、夜遅くに帰ってくるが、スケジュールは事業と志業の双方をこなすことができるように調整している。「妻はもちろん、私が外で忙しすぎることを望まず、家でもつと一緒にいて欲しいと言います」。自分がいつも外を掛け回り、妻一人に家庭を任せっきりにしていることと、妻と娘が自分のハードなスケジュールを心配してくれていることに対して、反省

している。「ただ、後悔はしていません。理由は、自分が何をしているかはつきり分かっているからです。家族の支えに感謝しています」。彼は重たい病院用ベッドを担ぎ、再びトラックを走らせた。

商売上での騙し合いへの警戒心を捨て、以前の高度な営業スキルを活かして、人々のニーズを理解して支援するのは、本当のマジンガーZにはなれないかもしれないが、優しい「お節介」な気持ちから慈善に投入し、使命をやり遂げる精神は今でも、「無敵」である。

（慈済月刊六五二期より）





## あなたが居てくれて良かった

この道にあなたたちが居てくれて感謝しています。これによって、この世にこんなにも多くの善行が為され、また皆さんの生命にも価値をもたらしているのです。

◎文・釋徳仇／訳・済運

### 福の中の福人、善の中の善人

九月二十四日、フィリピンの慈済人がオンラインでグレートマニラ地区とボホール島、ザンボアンガ市、オルモック市で行った貧困世帯に対する慈善配付活動について報告しました。ボランティアは「ジプニー」運転手の失業問題を報告しましたが、上人は、先日の新聞で読んだ記事を思い出しました。それは、タイ・バンコクのタクシー運

転手たちがコロナ禍で失業し、生計を立てるためにあらゆる方法を考えた結果、タクシーの屋根の上に野菜を植える、というものでした。

「世界にはお腹いっぱい食事がすることができない人がとても多いため、私は毎日、食事する時には必ず心から感謝します。今、オンラインで参加している人たちは皆、福の中の『福人』です。私たちが他人を支援できるということは、支援を受ける人よりも幸せだからです。ミャンマーの農民のように清貧な生活をしていても、彼らは毎日、一握りの米を米貯金しています。皆が貯金した米を持ち寄れば、数多くのより貧しい人を助けることができます」。

上人は、「人助けする」善意の念さえ起こせば、助けを必要としている人を支援する行動に出ることができる、と言っています。つまり、人々がそのような心を持ち、その力を寄せ集めれば、この世で飢餓に苦しんでいる人を助けることができます。「弟子たちの人助けをする過程や愛の心を募る感動的な話を聞いて、師父としても嬉しく思いました。というのも、師父が日頃から言っている

「この道にあなたたち皆が居ることに感謝しています。こんなに多くの人が心を一つにしているからこそ、慈済がこれほど多く世を利用することができ、また、私たち自身の生命の価値を成就させているのです」。慈済が人間（じんかん）で奉仕して来た力は少しずつ集まったものであり、水滴が河となるように、衆生を潤すようになっていきました。今、世界には飢餓に直面している人は非常に多く、慈済人の力だけでは焼け石に水で、その力は弱すぎます。従って、途切れることなく人間（じんかん）菩薩を募って、一人ひとりが善行するよう誘わなければなりません。毎日、少しでも節約できれば、大勢の力と合流して人助けができ、少しでも多く善意を施せば、それだけ多く人助けができるのです。

上人は、蔡青山（ツアイ・チンシャン）師兄が頻繁にボホール島で住民に関心を寄せ、ボランティアを導いていることに感謝しました。もし、慈済が一方的に配付ばかりしていたとしたら、その力には限りがあります。それよりも、現地の人が互いに助け合うよう励ませば、



ことを皆が心に聞き入れて実践している上に、大衆に対して実践した後の感想を分かち合っているからです。また、師弟が同じ心と志、そして共通した慧命を持つていることをつくづく感じました。人それぞれ異なる人生環境があっても、慈済人には共通の心の境地と願力があり、その精神と願力は『愛』から来ているのです」。

●フィリピンの多くのトラック運転手はコロナ禍で生活に影響を受け、慈済フィリピン支部はケソン市で400人余りの運転手に米と物資を配付した。

（撮影・ジャマカ・デイゴ）

貧しい人も貧しい人を助けることができ、そうすれば、人心を落ち着かせることができます。また、貧しい人々に野菜や瓜、果物の栽培方法を教えるのです。勤勉で真面目に働く気さえあれば、生活は安定します。しかし、高齢者や病人、障害者に対しては、愛でケアしなければなりません。従って、現地の企業家と住民を励まして愛の力を發揮させ、多くの奉仕を求めるのではなく、皆に発心を呼びかけて善に向かうよう導くのです。善があれば福が訪れ、災害は少なくなります。

「人間（じんかん）にはこんなにも苦難が多く、その苦難を翻すのはとても重い負担です。しかし、やはり自信を持って、絶えず大衆が発心立願し、共にその重責を担うよう導かなければなりません。福を造る人が多ければ多いほど、福の力は大きくなり、災害を減らすことができるのです。さもなければ、人類の欲は益々大きく膨らみ、業力もどんどん重くなって、人口の増加と共に、想像を絶するような結果をもたらします」。

「ですから今、人々を菜食に導いて、地球の負担を減らし、これ以上牧畜業者が飼育している家畜を増やしてはなりません。また、一人ひとりの愛と善意を啓発しなければならず、生活に支障がなければ、足ることを知って感謝すると同時に布施すべきです」。上人によれば、生活が裕福で愛に富んでいる人は「福の中の福人」ですが、生活が裕福でなくても、足ることを知っていて、いつも楽しく、また、喜んで布施する人が「善の中の善人」なのです。慈濟人は人々を「福の中の福人」と「善の中の善人」に導かなければいけません。

「皆が一層尽力し、私自身も頑張らなければなりません。生命は一分一秒と消えていきますが、それを輝かせることが大事です。蠟燭のように、その価値を發揮させるためには、火を付ける必要があります。暗いところを照らす時、一本から数多くの蠟燭に灯すことができます。益々広い範囲を明るく照らすことができますのです」。上人と大衆が共に人々の命の光を啓発すれば、社会に善と福が訪れ、善と福は気流となって、保護膜のように、この世の平安を守ることができます。（慈濟月刊六六〇期より）



# 十二月の出来事

訳・済運

<p>12・03</p>	<p>慈済基金会はアメリカのNPOカーモダヤから感謝賞を受賞し、アメリカ総支部の職員が代表で受け取った。カーモダヤは長年、インドのNPO・UPAYを支援しているが、慈済はコロナ禍で緊急支援の要請を受けて、百台の酸素濃縮機を寄贈した。また、その団体と協力して3917世帯に貧困支援の配付を行うと共に、5百人分のワクチン接種を支援した。</p>
<p>12・04</p>	<p>大愛テレビ局が製作した番組「熱血青年」と「青春の愛読書」が、台湾メディア観察教育基金会主催の「第21回国内制作子供番組優秀作品」で5スターの賞、また、「子供キャスターが見た世界WOW」と「伯源兄ちゃんのシークレットハウス」、「ドクターストレンジの奇想天外」が、それぞれ4.5スターと4スターを獲得した。</p>

<p>12・06</p>	<p>慈済科技大学に設置された国家試験花蓮地区デジタル化試験会場が、考選院考選部の認証を受け、即日、除幕式が行われた。当会場には380席が設けられており、医療スタッフや心理療法士などの国家試験に使用される。</p>
<p>12・08</p>	<p>慈済基金会は2021年「Buying Power 社会イノベーション・奉仕調達奨励メカニズム」の調達部門の一等賞と社会共栄部門の特別賞を獲得し、顔博文執行長と宗教処職員である曹芹甄さんが代表で賞を受け取った。</p>
<p>12・09</p>	<p>9日から12日まで慈済大学模擬医学センターで模擬手術講座が開かれた。本日、18名の医学生と56名の慈済病院の医師が参加して、8名の無言の良師のもとに学習が行われた。そのうちの2名の学生はポーランドの国立ポズナン医科大学とハンガリーのデブレツェン大学から来ている。13日に送霊儀礼と感謝追悼式及び入龕式典が行われる。</p>

12・14	大愛テレビ局のテーマ報道『消えたゴミ』が第35回呉舜文ニュース賞の「国際ニュース報道賞」を獲得した。また、慈済基金会慈善ニュースネットのカメラマンである蔡哲文氏が、タロコ号列車脱線事故での救出活動を記録した、『救出の第一線・救災と記録を行った英雄の視線』と題した作品で「ニュース撮影賞」を獲得した。
12・13	花蓮慈済病院は衛生福利部国家中薬研究所と共同で、中薬及び新型コロナウイルス肺炎国際合作防疫フォーラムを主催し、50数人の医療従事者がオンラインで参加して、台湾とフィリピンにおけるコロナ禍での中薬の経験を共有した。
12・17	12月中旬、アメリカは稀に見る冬の大型竜巻が発生し、中西部と南部の州に大きな被害をもたらした。アメリカ中西部の慈済ボランティアは支援活動を展開し、17日、18日、20日、22日に順次ミ

12・11	◎慈済基金会の「メキシコ豪雨災害支援チーム」が6日に現地に着し、現地ボランティアと共に9月の水害被災者に対する配付活動の準備を行い、11日、18日、19日に大きな被害を被ったモレロス州トラヤカパン市とイダルゴ州トゥーラ市、イクスキルパン市で、約1300世帯に物資交換カードとエコ毛布などの生活用品を提供した。 ◎慈済香港大圍連絡所が2019年より建物の修繕を行っていた「慈済環境保全願行館」が落成し、11月20日に参観が始まった。また、香港ジョッキークラブ慈善信託基金の寄付によるジョッキークラブ「心から始める」環境保全共同プロジェクトが始まり、展示や講座、工房などの活動が行われる。本日、その開幕式典が行われた。
12・12	證嚴法師は香港マカオ台湾慈善基金会の第16回「愛心賞」に輝き、慈済基金会の顔博文執行長が代表で授与式に出席し、賞を受け取った。

	12・20	<p>日と21日に順次被災地に到着し、現地ボランティアと合流して、支援活動を始めた。</p>
12・21	<p>慈済基金会の何日生副執行長の著作『善の経済・経済の利他思想と実践』が舍衛国（古代インドの都市名）基金会主催の第1回「舍衛国人文賞」（Shravasti Humanity Award）に輝いた。</p> <p>慈済大学付属高校は「ハンガー体験12・愛を世界に」と題した活動を主催した。飢餓体験を通して、教師や学生に、この国際的なテーマと物を愛して惜しむ精神を学ぶことに目を向けてもらうのが目的である。活動は慈済大学付属高校の教師と学生以外に、慈誠懿徳会及び保護者会も参加し、大愛感恩科技公司、タイ・チェンマイ慈済学校、花蓮光復商工学校などとオンラインで結んで行われ、3423人が国際災害支援に充てられる募金活動に呼応した。</p>	

	12・18	<p>ブルーリ州ディファイアンスとヘイテイ、ケンタツキー州アミシユコミュニティ、メイフィールド市で被災者にプリペイドカードと毛布、マフラーなどを配付した。</p> <p>◎マレーシアは17日から続いた豪雨で、8つの州に水害が発生し、特に首都クアラルンプールと隣接するセラングール州に甚大な被害がもたらされた。慈済セラングール支部とクラン支部は18日に支援活動を展開し、被災地に赴いて避難所で炊き出しを行うと共に、毛布と衣類を提供した他、被災者に協力して環境の清掃を行った。</p> <p>◎16日、猛烈な台風22号がフィリピン中部と南部、ボホール島、セブ島などを襲った。ボホール島の慈済ボランティアは18日から災害調査を開始し、マニラ、タクロバンなどの慈済ボランティアが20</p>
--	-------	---



# 各国の連絡所

## 本部

971 花蓮県新城郷康樂  
村精舎街 88 巷 1 号  
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966  
志業センター (静思堂)  
970 花蓮市中央路三段 703 号  
TEL: 886-40510777 # 4002  
0912-412-600 # 4002

## 花蓮慈济医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号  
TEL: 886-3-8561825  
玉里慈济病院  
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号  
TEL: 886-3-8882718  
関山慈济病院  
956 台東県関山镇和平路 125-5 号  
TEL: 886-89-814880  
大林慈济病院  
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号  
TEL: 886-5-2648000  
台北慈济病院  
231 新北市新店区建国路 289 号  
TEL: 886-2-66289779  
台中慈济病院  
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号  
TEL: 886-4-36060666  
大林慈济病院  
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号  
TEL: 886-5-5372000

## 慈济大学

970 花蓮市中央路三段 701 号  
TEL: 886-3-8565301

## 台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号  
TEL: 886-2-22187770  
慈济人文志業センター  
112 台北市立德路 2 号  
大愛テレビ局  
TEL: 886-2-28989999  
静思人文  
TEL: 886-2-28989888

## アメリカ

総支部 (San Dimas)  
TEL: 1-909-4477799  
北カリフォルニア支部  
TEL: 1-408-4576969  
ニューヨーク支部  
(New York)  
TEL: 1-718-8880866

## カナダ

TEL: 1-604-2667699

## メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

## ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

## ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

## イギリス London

TEL: 44-20-88699864

## フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

## ドイツ Hamburg

TEL: 49(40)388439

## オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

## スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

## オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

## 南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

## 中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

## 香港

TEL: 852-28937166

## フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

## タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

## ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

## ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

## マレーシア

Penang  
TEL: 604-2281013

## Malaka

TEL: 606-2810818

## シンガポール

TEL: 65-65829958

## インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

## 大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

## スリランカ Hambantota

TEL: 94(0)472256422

## ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

## トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

## オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

## ニュージーランド

Auckland  
TEL: 64-9-2716976

# 慈濟

2022年1月20日発行・301号  
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄  
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈济基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈济日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈济基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈济に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



## 最高の景色 河川上で白米を配付

インドネシアは5月のラマダン明け休暇が終わった後、コロナ禍の第2波が押し寄せた。7月中旬にピークを迎え、新規感染者数は1日で5万人超に激増した。慈済インドネシア支部は、医療機関に防疫グッズと医療用品を支援した他、生活困窮者への慈善配付活動も続けている。ペカンバル市の慈済ボランティアは、リアウ州警察署の水上警察と協力して、10月5日にシアク川流域付近に住む漁民と臨時工を対象に、10キロ入りの白米を300袋配付した。



慈済日本サイト 慈済ものがたり